



# 宇宙衛生博覽會

筒井康隆

新潮社



宇宙衛生博覽會

一九七九年一〇月一五日発行  
一九七九年十一月二〇日四刷

著者 筒井康隆つづい やすたか

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一

振替東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価七五〇円

© 1979 Yasutaka Tsutsui  
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

宇宙衛生博覽會／目次

蟹 甲 癬	5
こぶ天才	19
急 流	39
顔面崩壊	57
問題外科	71
関節話法	99
フリスト・コンタクト 最悪の接触	125
ポルノ惑星のサルモネラ人間	157

装  
幀  
横  
尾  
忠  
則

宇宙衛生博覽會



蟹 かに

甲 こう

癬 せん





クレール蟹の崇りに違いない、と、最初は誰もがそう思った。そう思ったのも無理はなく、とにかくクレール植民地における人間たちのクレール蟹に対する態度というものは「外惑星植民地に於ける現地生物との接触に関する条例」などおよそ無視したひどいもので、この十二本足の大型蟹を殺して殺して殺しまくったのだ。もつともクレールへやってきた植民地人、以下はクレール人と呼ぶが、そのクレール人たちにしてみればクレールで他に目ぼしい動物性蛋白質はなかったのだから、個体数の少ないクレール蟹を他の誰かに食べられてしまわないうちにと競争でむさぼり食ったのであり、これは少しでも地球から持ってきた食糧をながく食いのばし、いつ来るかよくわからない次の便を待つ間の不安をちよつとでもなくそうとしたのだから、人間よりも他惑星の下等生物の方が大事と考える臍まがりでない限り彼らを責めることは誰にもできるまい。責めるとすれば、クレールにおけるたつたひとりの環境調査官たるおれの役目であろうが、おれだつてクレール蟹はずいぶん食い、あまりの旨うまさに自制しかねて絶滅寸前であることを知りながらまだ食ったのだからひどいものだ。

クレール蟹の旨さ、特にその甲羅の裏の、俗に蟹の味噌とか蟹の脳味噌とかいわれているあの

ペースト状の白い脂肪の、頬が落ちそうな美味等に関してはくくだしい説明を省略し、さつそく、のちに蟹甲癬症と名づけられたあの皮膚疾患がクレール人の間に蔓延まんえんしはじめた頃の騒ぎにまで話をとばすことにしよう。蔓延はまたたく間であった。まず皮膚が乾燥している老人、特に五十歳以上の男性の中から、左右どちらかの頬の皮膚の角質化とそれに伴う痒みかゆみを自覚し、訴える者が出はじめた。痒いものだから頬をばりばり掻きむしると、角質化した白い表皮がぼろぼろと剝落はくらくし、さらに掻き続けると真皮が破れて血がにじみはじめた。この真皮の壊死くわいしした組織がまた角質化し、それは以前のものよりもさらに硬くなって、次第に赤褐色を呈しはじめ、やがて硬さとい色といい、また形といい、ちようどクレール蟹の甲羅を頬へ張りつけたようになる。これこそが症名の由来なのである。症状がここまで進んでしまうと痒みはなくなる。そしてしばらくはそのままの状態が続くのである。

原因不明で治療法も見つからぬまま、患者はどんどんふえていった。医師の水戸辺先生は最初老人性の皮膚疾患であろうと考え、患者に栄養剤や栄養クリームをあたえているだけだったが、それによって病状の進行を食い止めることができないことはすぐにわかり、これは風土病であろうと考えなおし、あわてて細菌学者の承博士やおれの協力を求めてきた。

おれたちは患者を片っぱしから調べ、壊死した頬の組織を観察した。患者の大きく開いた口腔を覗きこんで頬の患部の裏側を見るとそこも角質化していることが認められ、外科的に患部を除去することが不可能であることをおれたちは知った。じつは比較的裕福な老人の患者が疾患初期に水戸辺先生のところへやってきて、手術によってこのいまましい皮膚を剥ぎとってくれと頼

んだことが二、三度あったらしい。水戸辺先生は拒んだらしいが、もしやっていたら大変、頬にぼっかりと大きな黒い穴があくところだったのだ。角質化は頬の薄く柔らかい筋肉にまで及んでいたのである。

承博士は切りとった患部の組織から、このクレールの海水中に多く見かける連鎖球菌を発見した。これはもともとクレール蟹に寄生している細菌だったのだ。しかし、クレール蟹を食べたためにこの細菌が人間へ移ったのか、あるいはクレール蟹がいなくなつて宿主に困つたこの細菌が人間を新しい宿主に選んだのか、そこまでは承博士にもわからなかつたようだ。

承博士が疾患の原因をほぼこの細菌と考え、仮に蟹甲癬菌と名づけたこの連鎖球菌が嫌う物質を発見しようとして研究している最中、患者の一部の者が自分の頬の甲羅を自由自在に取りはずしたりもとへ嵌めこんだりしていることが判明し、またもや大騒ぎになつた。これをいちばん最初にやりはじめたのは市のはずれにひとりで住んでいて日中は他の連中とウラニウム鉱山で働き、日没後は海へ出て残り少ないクレール蟹を漁るといふ日課をくり返していたロドリゲス爺さん。ある夜頬の蟹甲癬をいじりまわしているうちにぼっくりと甲羅がはずれ、頬に楕円形の穴があいて奥歯と歯茎がまる出しになつてしまつた。びっくり仰天した爺さんが大あわてで鏡を見ながらなんとかもと通り頬に甲羅を嵌めこもうとして周囲の皮膚をつまんだり引っぱったり苦心している、今度はびったりもとに納まつた。コツさえわかれば簡単に取りはずしできることを知つた爺さんが、近所の子供たちの人気を得ようとして腕白連中を集めこれをやつて見せているうち、母親たちが騒ぎ出した。

「やめてください」

「グロテスクです」

「子供たちにあんなものを見せるなんて、悪趣味だわ」

噂が市内に拡まると、もしかしたらおれにもできるかもしれないと考えて患部の取りはずしを試みる老人たちや、また、隣りのお爺ちゃんにできるのならうちのお爺ちゃんにもできる筈というので孫にやってみせろとせがまれ、しかたなくはずして見せる老人もいて、そのうち、どうやら患者がすべて甲羅を自由自在に取りつけ取りはずしができらしいということは明確になってきた。

「ずいぶん変な病気ですなあ」

おれと承博士と水戸辺先生は、承博士の研究室に集まって善後策を相談した。クレール植民地市民二千八百名の生命はおれたち三人が預っているといてもいいのだから、責任は重大である。

「あの、甲羅の取りはずしの頬べたばつくりこ、禁止するよろし」と、承博士はいった。「症状これから先、どう進行するか、わたしたちまったく予想できとらんのことよ。あの黴菌、何食べているかもよくわかっていないある」

「頬の筋肉に寄生しているんじゃないんですか」

「ところが頬べたの筋肉壊死しても他のところに症状あらわれない。もう片方の頬べた、不可思議のことに、なんともない。どこに潜伏しているかもわからないのでたいへん困ることな。手の打ちようないよ」

「患者の誰かが死ねば解剖できるんですがね」五十六歳の水戸辺先生が、頬をばりばり掻きむしりながらいった。どうやら彼も蟹甲癩菌にとりつかれたらしい。

「クレール蟹の捕獲は全面禁止しました」と、おれはいった。「もとの個体数に戻って安定するまで、だいぶかかるでしょうが」

甲羅の取りはずしは見る者に不快感をあたえるので、ひと前では慎しむようにとの警告が全市に行きわたり、大っぴらにこれをやって見せる老人の姿は滅多に見かけなくなった。症状の進行も停まった様子で、これ以上悪くはならないのかと思っておれや先生や博士がややほっとしかけた時、またまた変な噂を耳にした。

噂の主は七十二歳ですでに隠居している前クレール市事務官のマックス氏である。このマックス氏がある夜自分の部屋で、ひとりこっそり頬から取りはずした甲羅をつくづく観察しているうち、たまたま、いつの間にか甲羅の裏側に、ちょうどクレール蟹の甲羅の中にある例の白いペーパースト状の「脳味噌」のような物質が多量に付着していることに気がついた。そこでさっそく、ためしに指さきでこそげ取って食べてみたというのであるが、ここが老人の無神経なところで、よくぞまあ、自分の皮膚病の患部を食う気になったものだ。しかし勇気をふるって食べてみただけのことは充分あったらしい。なんとそれは、あの美味なクレール蟹の「脳味噌」そっくりの味だったというのだ。この話を聞き、さっそく自分の頬の患部から「脳味噌」をこそげ落して食べはじめた老人もいるらしい。味がひとによって違うということもなく、いずれもクレール蟹の甲殻内の脂肪そっくりの旨さであるという。そんな不潔なものをよく平気で食えたと思うが、他人の

ものならともかく、自分の肉体の一部に発生したものであるから、ちようど子供が自分の瘡蓋かさかたをひっぺがして食うようなもので、わりあい汚さを感じないのであろう。

この話を聞いておれたちはまた心配になり、そんなものを食って生命に別条はないのかと、さつそく患者の患部から少し採取してきた「脳味噌」を分析してみた。しかし承博士の分析によれば成分は高分子の蛋白化合物であつたらしく、これはどうやら患部の組織と崩壊した蟹甲癬菌が混りあつてできた物質であらうということになり、食べてもたいした害はないことがわかつたので、特に食うなという警告は出さぬことにした。あまりさまざまな警告を矢継ぎ早に出しても効果はない。

クレール蟹の「脳味噌」があんなに旨かつた理由は、寄生していた連鎖球菌のためであつたようだ。ではあの連鎖球菌を研究すればすばらしい調味料が発見できるのではないかと、おれはそんなことを思った。しかしそのような呑気のんきなことを考えている場合ではなかつた。患者はどんどん増加し、爺さんだけに限らず婆さんや中年の男性にまで疾患は拡がりつつあつたのだ。水戸辺先生も承博士も、そろそろ取りはずしができると思える大きさの甲羅を片頬に張りつけていた。

蟹甲癬のことは地球にも伝わつたらしく、ばつたりと貨物の便が来なくなつた。見捨てるつもりはないのだが、伝染を恐れて行く者がいない、もう少し待ってくれという連絡が多くの中継衛星經由で二、三度あり、その連絡さえすぐに途絶えた。見捨てるつもりなのである。たちまち食糧事情が悪化した。栽培しているクロレラだけが頼みの綱となり、なんとかこのクロレラ以外に現地で栽培できるものはないかと皆が食いの捜しや菜園作りにけんめいとなつたため、またた

く間に鉦山は荒れ、採掘機械は錆びはじめた。ウラニウム鉦を採掘したって、取りにくる船はど  
うせ一隻もないのだ。

動物性蛋白質が不足してくると、蟹甲癩症患者にとつては自分の患部の「脳味噌」が貴重な栄  
養源になってくる。なぜかこの「脳味噌」、全部残らず舐めてしまつても、頬に嵌めこんでさえ  
おけば次の日にはちゃんと甲羅の裏に何十グラムかが付着していて、なくなるということがない。  
孫や近所の幼い子供たちにせびられ、甲羅の裏を舐めさせてやる老人もいて、最初のうち母親は  
じめ家族の者はこれを汚いと思つて厭がったが、老人に食わせてくれるなど頼むと、旨いものは  
よく知つていて不潔さなどなんとも思わぬ子供たちが、あの「頬が落ちる」ぐらいおいしいお爺  
ちゃんのお味噌が食べたいと泣きわめき、老人も「脳味噌」を子供たちに舐めさせてい  
ると自分の肉体の一部を彼らに頒ちあたえているような気がし、これにはなんとなしに動物的本  
能に通じる快感があるので食わせたがる。そのうちいよいよ食いものが欠乏し、患者が自分の  
「脳味噌」を食うことが常識となり、誰もおかしいと思わなくなつてくると、家族の者も子供の  
おやつを提供してくれる老人に感謝さえするようになった。

患者数の方はどんどんふえて低年齢層へと拡がっていき、中年女性からついに青年男女にま  
で及んだ。比較的初期に感染した若い娘の中から自殺者さえ出たが、やがて、ちよつと町を歩  
けば子供を除くとその辺にいる人間みんな頬に蟹の甲羅をひとつずつへばりつけているという有  
様になったため、苦痛がないせいもあるが、さほど気にする者もいなくなつてきたようであつた。  
むしろまだ罹患していない者が甲羅の中の珍珠を食いたがり、寝ている間に甲羅を盗まれたとい



う頬べた盗難事件さえ起った。

おれ自身もある晩夢うつつで痒い頬を掻きむしったため、朝にはくつきりと右頬に暗赤色の蟹の亡霊が浮かびあがっていて、ついに蟹甲癬症患者の仲間入りをすることになった。こうなってくるともうやけくそ、一日も早く自分の頬の「脳味噌」を食いたいものだと思直って、症状の進行を待ち望む気になり、今さらあわてふためくこともない。

とうとう患者の中から死者が出た。といつても蟹甲癬のためではなく、心臓病によるものであることははっきりしていたから、誰もあわてたり恐れたりする者はいなかった。死んだのは六十九歳のモハンダス爺さん。ながらく採掘場の監督をしていたのだが最近急に惚けてきて人の名前がわからなくなつたため隠居していたのだ。心臓は中年以後の持病で水戸辺先生が診療していた。われわれはこのモハンダス爺さんを解剖し、蟹甲癬菌の人体寄生ぶりを徹底的に追求することにした。

その連鎖球菌は内臓からも四肢からも発見できず、最後に頭蓋をとり除いてみるとやつと脳の中から出てきた。驚いたことにこの細菌、脳を食い荒していたのである。モハンダス爺さんは大脳皮質の厚い灰白色の部分を侵され、そこはぼろぼろになっていて、量も減っていた。

「あれは脳味噌だつたのだ」と、水戸辺先生は叫んだ。「われわれはたまたま『脳味噌』などと呼んでいたが、あの珍味はなんと、本当にわれわれ自身の脳味噌が細菌によって物質代謝されたものだつたのだ」

「曖呀アイヤ。わたしなぜ早くそれ気がつかなかつたのことよ」承博士が嘆声をあげた。「頬べたの壞